巻頭言

宮城植物の会の発足に寄せて

東北大学理学部生物学教室　吉　岡　邦　二

わたくしどもは日頃人間社会の中で生活し，人と人とのつながりによって暮しをたて，それだけで毎日を過していることが多い。しかしそれだけでは心が満たされないことは誰しも経験することかと思う。ある人は音楽や芸術に，またある人は文学や宗教に，そしてある人はスポーツに情熱を傾ける。

人間は人間である以前に動物や植物と同じく生命をもつものとして自然界の一員であり，自然の理法にしたがって初めて生きることができる。われわれは地球上の同じ生き物仲間である動物や植物といっしょに生活し，また直接的にも間接的にもそれらのおかげで生き続けている。この生き物仲間に関心をもち，それらの生活や，習性や形や色彩に感動しそれらをさぐろうとする人も少くないのは当然のことと思う。

わが国の国土は狭いが，南北に長く，亜熱帯から亜寒帯にわたり，また氷期の寒冷の影響を受けることが少なかったので，植物の種類は豊富であり，しかも春夏秋冬の季節の移り変りも明瞭なため四季折々の植物の姿は絶えずわたくしどもの目を惹いている。

わたくしどもの郷土宮城県は東北地方中部にあるが，海岸地帯には南から北上してきた暖温帯植生が名残りを止め，モミ－イヌブナ林やブナ林など冷温帯植生から，亜高山植生や高山植生など亜寒帯ないしは寒帯植生も見られる，われわれはこのような多様な植生の多数の植物を身近かに見て，感動し，興味をもち，探究し，愛してきた。春になるのを待ちかねて多様に進化したスミレの採集に熱中したり，ミズバショウの花咲く湿原をなんべんも訪れたりした。秋がくればリンドウやセンブリの咲く野を訪ずれたり，キノコを捜がしに森をさまよい歩いている。

県内に住む植物同好の士が寄り集まって，日頃それぞれの地域で知り得たことや疑問に思っていることを話し合って，お互の知識の交流をはかり，植物を愛する喜びを語り合うことはたいへん楽しいことである。このたび，熱心な有志の努力によって宮城植物の会が発足するにいたったことは，わたくしども植物愛好者にとってたいへん嬉しいことである。

人智が高度に進歩した今日でも人間は生物の創造はできない。どんな種類の野草でも大切であり滅亡してはならない。植物は動物の食餌であり隠れ家であり，人間はそれら植物や動物に頼って生きなければならない。そして，植物や動物を保護できるのは人間だけである。わたしたちは植物を愛し研究するだけでなく，無用な消費を防ぎ，どの植物も自然の状態で生き続けられるような心使いが必要と思う。宮城植物の会は従来あり来りの植物愛好者の集まりというだけでなく，郷里の植物の自然の姿がいつまでも保たれるような工夫をする人が多ければなお存在の価値が高くなると思う。